荒屋敷貝塚出土の
縄文時代中期土器について

奈　良　忠　寿

はじめに

武蔵野台地や東京湾東岸地域の縄文時代中期前半の土器の中には、器形や文様、胎土の点において複数の型式の特徴が組み合わさった土器が存在する。このような土器は従来の型式研究のなかで折衷土器と呼ばれ、複数型式の交流の様相を知る手がかりとして分析されてきた（佐藤1974、小林1984など）。

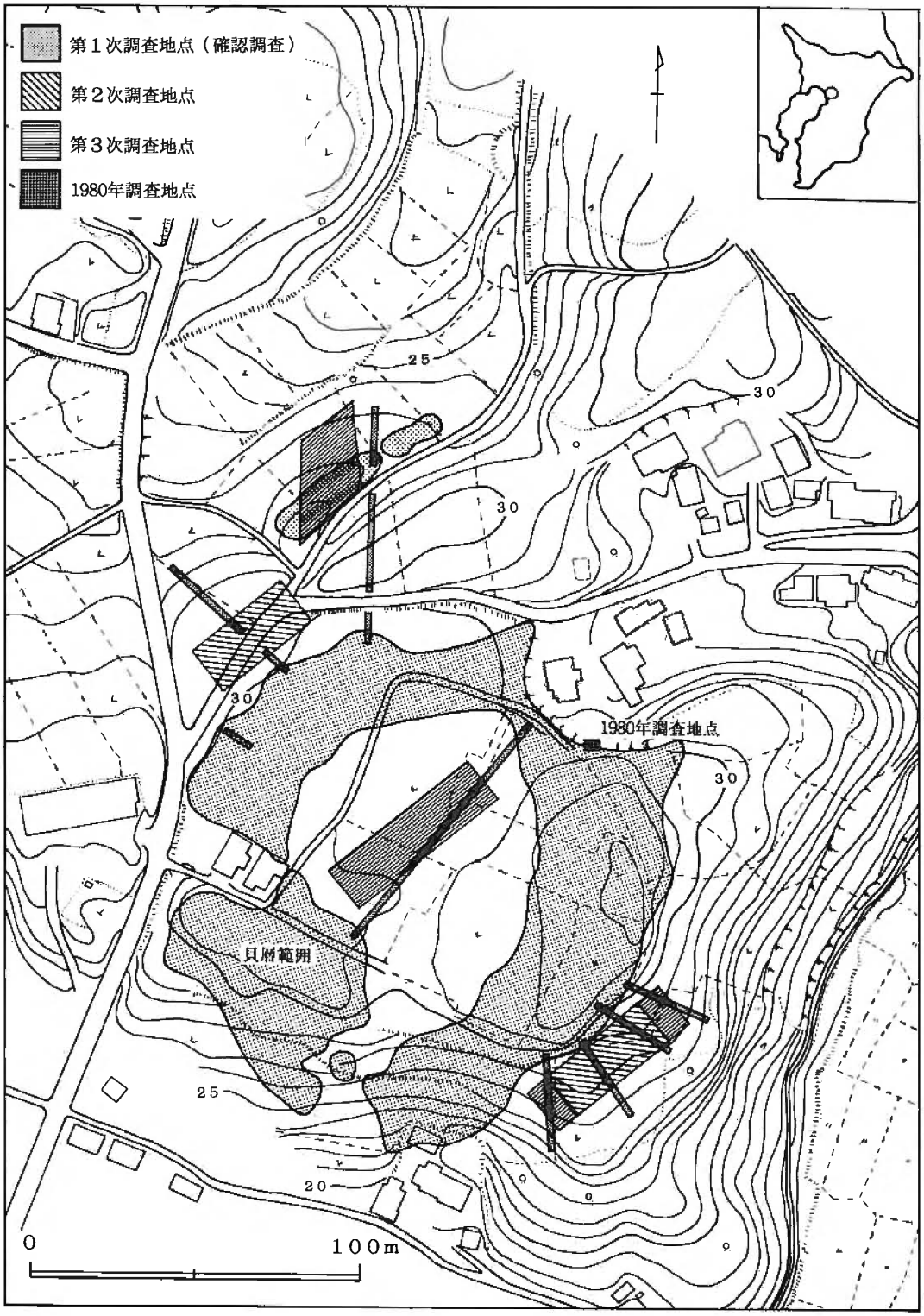
このほど、荒屋敷貝塚出土の土器のなかに一見すると勝坂式土器と阿玉台式土器の特徴が組み合わさっているように思える土器があることを知り、それを観察する機会を得た。この土器を阿玉台式土器と勝坂式土器の関係で捉え、その組合せの状況や成立の背景を考えることは、東京湾東岸地域における勝坂式土器と阿玉台式土器の交流の様相や、阿玉台式土器の変化の中に勝坂式土器の与えた影響を考える上で興味深い。そこで、阿玉台式土器と勝坂式土器という二つの土器の影響から成立したものとして荒屋敷貝塚出土の土器を捉えることにより、この土器の成立から捉えられる状況を考えてみたい。

1．遺跡の立地と過去の調査

荒屋敷貝塚は、千葉市貝塚町に所在する馬蹄形貝塚である。千葉市の位置する東京湾東岸地域は全国でも有数の貝塚密集地帯として知られるが、荒屋敷貝塚はその中でも規模の大きな貝塚として著名である。遺跡は、葭川の河口から北に広く開析する高品支谷と荒屋敷支谷に挟まれた、標高約30ｍの広大な舌状台地の東側縁辺に立地し、貝塚の規模は東西約160ｍ、南北約150ｍをはかる。荒屋敷貝塚の位置する舌状台地には、このほか台門貝塚、荒屋敷西貝塚、荒屋敷北貝塚、草刈場南貝塚、草刈場貝塚等が存在し、一大遺跡群を形成している。この遺跡群は、貝塚町遺跡群とも呼ばれている。

荒屋敷貝塚は規模の大きな貝塚として知られているが、かって京葉道路建設にからみ、消滅の危機に瀕したことがある。様々な検討の結果、京葉道路を遺跡の位置する台地の下にトンネルを通して建設することで、貝層部分は保存されることになった。遺跡の現状は、貝塚部分の下にトンネルが建設されているほか、貝塚西端部に家屋が３軒建ち、北東部の貝層の一部も民家によって破壊されている。

荒屋敷貝塚は、終戦後まもなく学習院中等部の試掘が行われたのみで、1968（昭和43）年の



第１図　荒屋敷貝塚の立地と過去の調査地点

加曽利貝塚博物館による測量調査が行われるまで本格的な調査は行われていなかった。この加曽利貝塚博物館による測量調査と、京葉道路建設に関わる3次にわたる調査によって、荒屋敷貝塚の様相が部分的ではあるが明らかとなっている。

京葉道路建設に関わる調査としては、1973（昭和48）年に第1次調査として状況の把握のための遺構確認調査が行われ、貝層と遺構の分布が把握された（西山　1974)。1975（昭和50）年には第2次調査として貝塚外縁部の調査が行われた（中村・中山・森　1976)。これらの調査の結果を受けて、各機関の間で調整が行われ、京葉道路の建設方法と荒屋敷貝塚の保存方法が決定された。そして、道路建設によって破壊される部分の調査と外縁部貝層の試掘を行った第3次調査が行われている（種田・斎木　1979)。これらの調査によって、貝層の形成が縄文時代中期に始まり後期まで存続することが確認され、主に縄文時代中期に属する住居跡・土坑・人骨を伴う土壙墓、古墳時代の住居跡等の遺構や、縄文時代前期から後期の土器・石器をはじめとする遺物が検出されている。

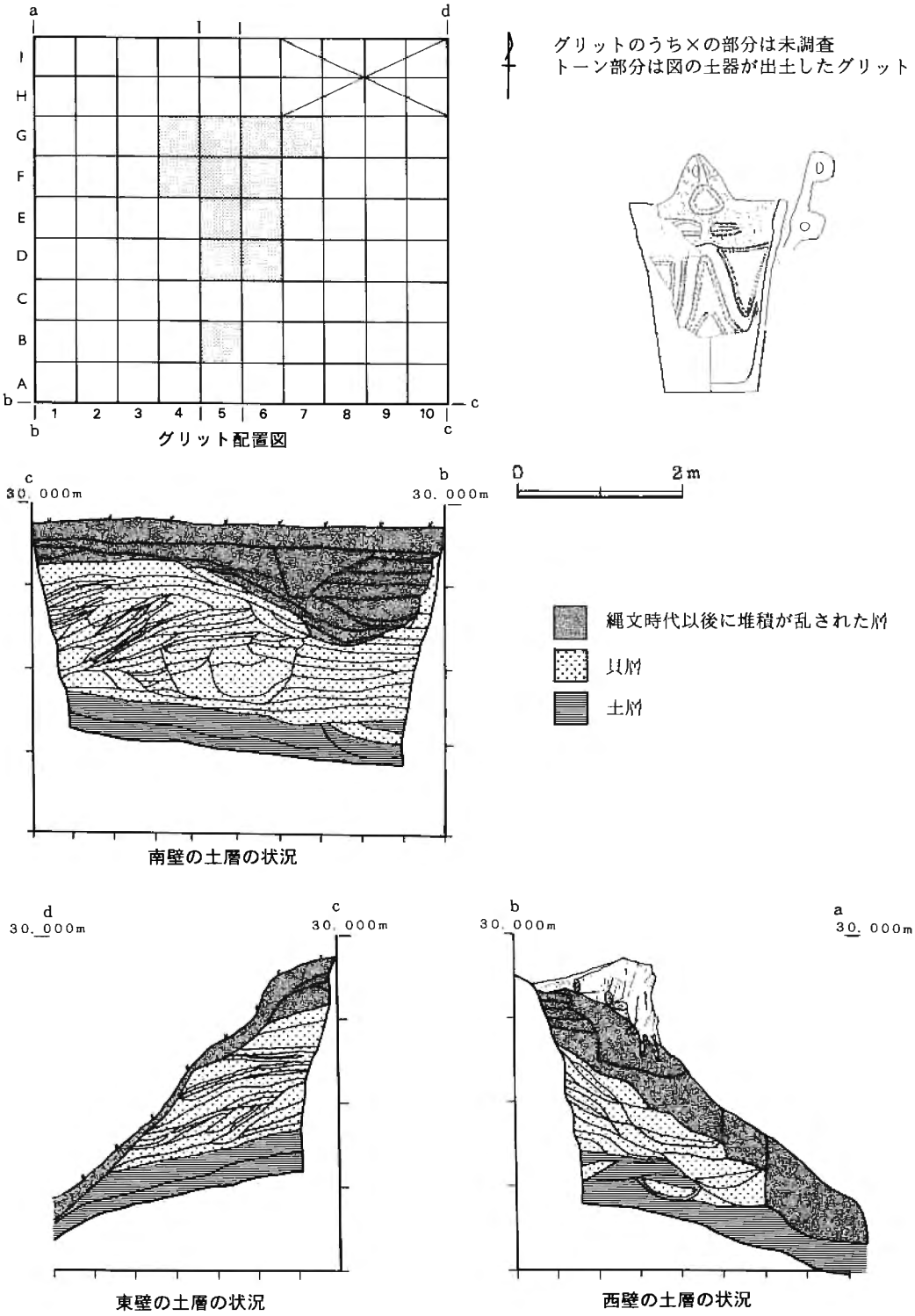
今回報告する資料は、1980（昭和55）年に、民家によって破壊されていた北東部の貝層部分を緊急調査した際に出土したものの一部である。調査区は斜面部に露出した貝層部分に5ｍ×4ｍで設定された。その中を磁北に軸を合わせる形で50㎝方眼のグリットを設定し、南西側を原点とし、南北をアルファベットで、東西をアラビヤ数字で示している。調査は調査区中央の5グリットの列をセクション観察用のベルトとして残し、グリット単位で層位ごとに遺物をとり上げる方法で調査が行われた。今回とり上げる個体1の土器は、トーン部分のグリットから出土している。この調査では第2図に見られるような複雑な堆積状況が明らかとなり、多量の遺物が出土したが、まだ整理が終了していないことと、今回は折衷土器に重点を置くため、調査の全体を明らかにすることはしない。1980年の調査の出土資料と記録類は加曽利貝塚博物館に保管されている。

2．荒屋敷貝塚出土の折衷土器の特徴とその位置づけ

(1)　分析の視点と方法

折衷土器の研究は、佐藤達夫氏が異系統文様が結合した土器として分析を行ったことが契機となり、本格的に研究が行われるようになった（佐藤　1974)。その後、折衷土器の分析は複数の型式間の関係を検討する際に用いられ、近年では土器型式の細かい地域性を明らかにするときの代表的な手法となりつつある（小林　1984、1994a、1994b、山口　1990、1991、1992など)。これらの研究では、その方法として、土器を文様帯と文様区画、文様要素などに分解し、それぞれを検討することで折衷土器を理解しようとする方法を用いている。

今回紹介する荒屋敷貝塚出土土器は、勝坂式土器と阿玉台式の特徴が一つの個体に認められる折衷土器である。この土器の特徴から考えると、その型式学的な位置づけを試みるには、土



第２図　1980年調査地点全体図と土層の状況

器を器形や文様区画などの要素に分解し、それぞれについて阿玉台式・勝坂式土器の特徴と比較・検討する手法が有効だと考える。その際に比較する対象として、勝坂式土器（鈴木　1981）と阿玉台式土器（西村　1972）をモデルとして両極に置き、両者との関係から考える。実際には、勝坂式土器・阿玉台式土器ともに細かな地域差が内包されている可能性があり、単純な勝坂式土器・阿玉台式土器という二極的な概念からは折衷土器の実態を捉えきれず、その点を考慮した検討の必要性もあろう。だが、今回は理解を容易にするために大きな土器型式の枠のなかで考えることとする。

ここでは、まず対象土器の特徴を述べてから、文様帯・文様構成・文様要素・施文手法の点から考えていきたい。

(2)　対象土器の特徴

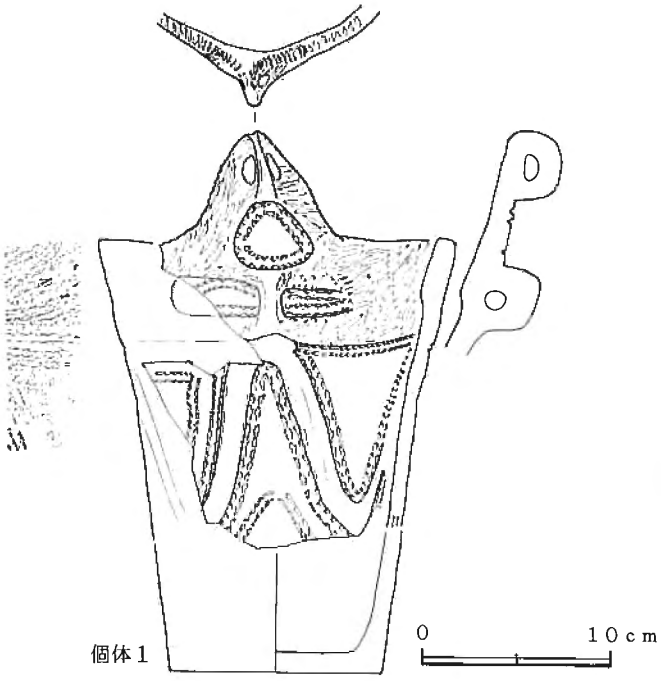
今回とり上げる土器は、胴下半部と口縁部の半分を欠損した深鉢形土器である。欠損部が多く、口縁部、胴部共に破片が一周する部分は存在しない。口縁部直径18.8㎝、残存高は把手部も入れて21.8㎝で、深鉢としては小形の部類に含まれる。器形はバケツ型に口縁部が開き、口唇部は肥厚し、内側にゆるやかな稜を持つ。土器全体の印象としては、ややいびつな形の土器だという印象を受ける。口縁部は全周していないが、大形の把手が一つ付けられ正面観を強調する器形だと考えられる。波頂部には眼鏡状突起がつけられ、把手の付け根には橋状突起を持つ。文様帯としては、把手部を含めた口縁部文様帯と胴部文様帯の２帯で構成される。

口縁部文様帯の文様区画は太い隆帯で区画され、隆帯というよりも帯状に肥厚した部分に彫り込んで構成されている様な感じをうける。把手部には眼鏡状突起の直下に三角形の枠状区画がなされ、さらにその下に橋状突起を中心として楕円区画を２つ持つという構成をもつ。三角形の枠状区画、楕円区画内には半截竹管の内側を使用した２列一組の連続刺突文が区画を構成する隆帯に沿って施文されている。また、把手部の口唇部には篦状工具による刻みをもつ。口縁部文様帯の隆帯上には無節Ｒの縄文が施文されており、その施文方向は不規則である。

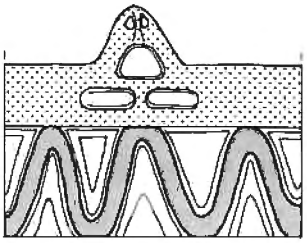
胴部文様帯は扁平な隆帯による３単位の波状文で区画されている。区画を構成する隆帯に沿って口縁部文様帯と同じ施文具による連続刺突文が施文され、区画内に充填されている連続刺突文による三角形のモチーフと組み合わさり、入れ子状になっている。しかし、把手部の左下の区画のみ例外的に内部に三角形のモチーフが充填されていない。土器の胴下半部が欠損しているため、胴部文様帯の下端部が隆帯によって区画されていたかについては不明である。

施文の順序としては、隆帯による区画文をまず貼付け、その後に口縁部に縄文を施文し、最後に区画内に連続刺突文を施文するという手順が観察できる。

内面のミガキは顕著で、胎土には長石・砂粒・軟質褐色粒子を含むが、阿玉台式土器に特徴的とされる雲母は含まない。



実測図



文様展開模式図

土器正面

把手部

胴部の連続刺突文

第３図　1980年調査で出土した折衷土器

(3) 土器の型式学的な位置づけ

分析の視点と方法で述べたように、折衷土器の型式学的な位置づけを考える上では、土器の全体を漠然と検討するよりも、土器をいくつかの構成要素、たとえば器形や文様区画などに分解し、その構成要素ごとに検討をくわえたほうが良いと考える。また、この土器が阿玉台式土器と勝坂式土器の両方の影響を受けているものならば、この土器を構成する要素は、阿玉台式土器の系譜のなかで成立・発展した要素と、勝坂式土器の系譜の中で成立・発展した要素が組み合わさり成立していると予想される。こうしたことから、土器を検討していく上で、土器を構成要素に分け、器形と文様区画、文様要素と施文手法の順にどちらの系譜の中で考えられるかを検討していく。

a）器形と文様区画の検討

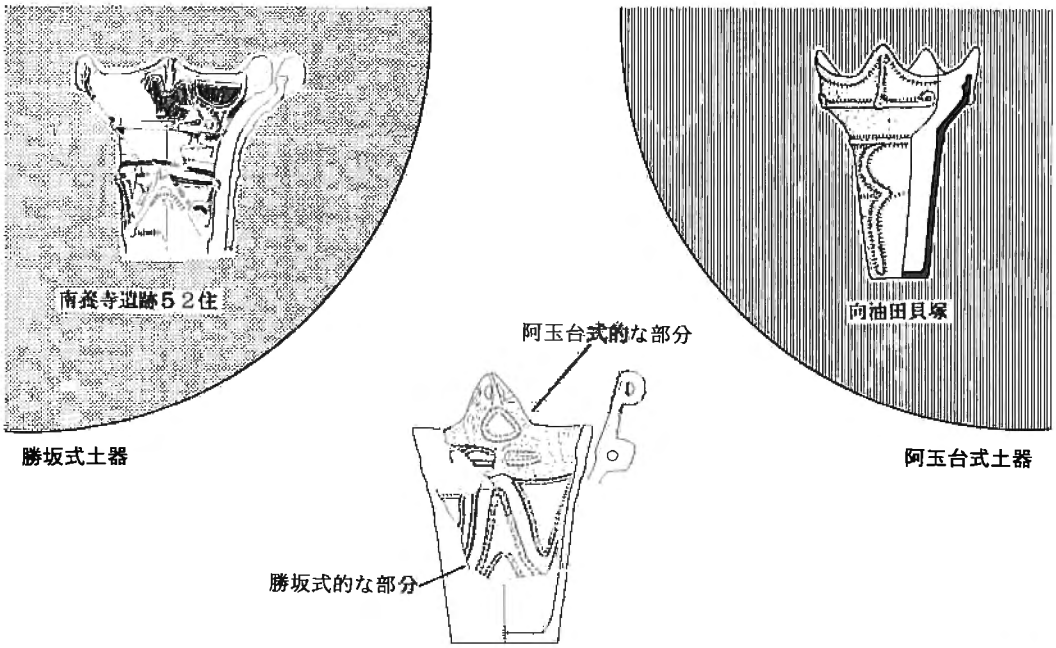
個体1は、正面観を強調する大形の把手をもち、バケツ型に口縁が開く器形をしている。把手や突起で正面観を強調する器形はかねてから指摘されているように（谷井1979a・b)、勝坂式土器の特徴である。また、バケツ型に開く器形も、勝坂2式から3式の小形土器に見られる器形である。

文様区画については、把手部も含めた口縁部文様帯と、胴部文様帯とに分けて検討したい。口縁部文様帯のうち、波頂部には眼鏡状突起がつけられている。眼鏡状突起は、勝坂式土器に多く見られるものであり、その成立と変遷も勝坂式土器の変遷の中でたどることが出来る。また、勝坂式土器の文様区画が眼鏡状突起を中心に展開していくことからもわかるように、勝坂式土器の特徴の一つと考えられる。

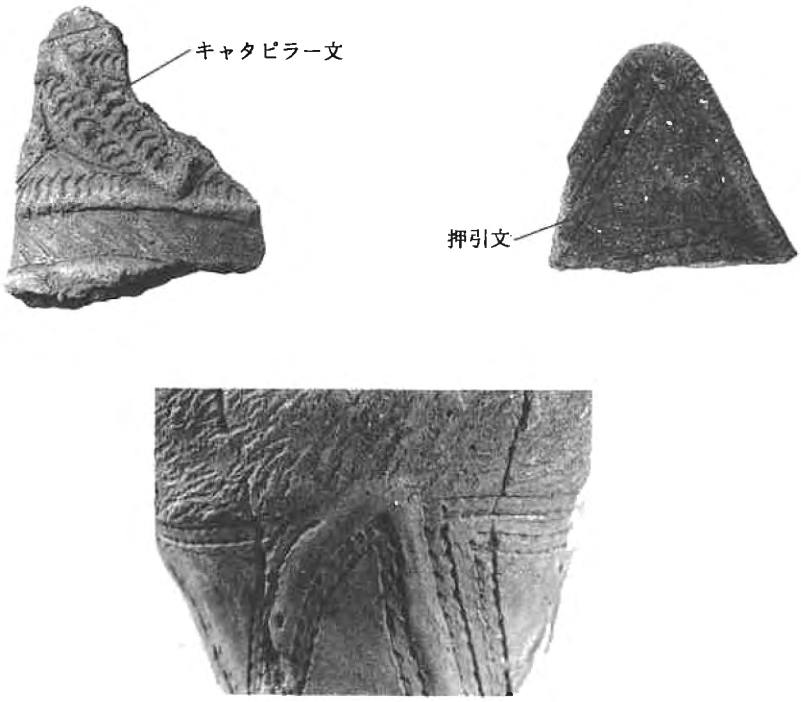
次に把手の付け根から口縁部にかけて認められる枠状区画の部分であるが、この部分は阿玉台式土器の山形の枠状文をモチーフとしていると見られる。山形の枠状文も阿玉台式土器の変遷とともに変化し、阿玉台式土器を特徴づける区画の一つと言える。この土器に認められるように、把手部と一体化した文様区画は阿玉台式土器の把手部分によく認められるものである。

以上のように土器の口縁部文様帯を勝坂式土器と阿玉台式土器という2つの型式の観点から見た場合、把手全体は阿玉台式土器の区画を基本としながらも、波頂部に勝坂式土器の特徴を取り入れているという構成が把握できる。

胴部文様帯の文様構成については、勝坂式土器の三角区画文を取り入れているとみられる。文様帯の下端部が欠損しているため、下端区画が存在したかは不明である。勝坂式土器の三角区画は、勝坂1式新段階に成立し、2式から3式にかけて勝坂式土器の主要モチーフのひとつとして盛んに用いられる。また、勝坂式土器のなかには三角区画が変化したとみられるW字状に隆帯を貼付するものも存在するため、下端区画の有無を問わず勝坂系の文様構成と考えられる。ちなみに、荒屋敷貝塚でも1980年に行われた調査で出土した土器のなかに、三角区画文を胴部にもつ勝坂式土器が認められる。



【文様区画にみる阿玉台式・勝坂式の影響】



個体１胴部の連続刺突文

【隆帯脇の文様要素の比較】

第４図　文様から見た型式学的な位置づけ

b）文様要素・施文手法の検討

文様の要素としては、隆帯の形状、口縁部に施文されている縄文、区画の脇と区画内に施文されている連続刺突文等が挙げられるが、そのうち連続刺突文について考えたい。

連続刺突文は、文様を構成する区画文にそって2列一組で施文され、区画内にも同様の文様が施文されている。この文様は、その半截竹管の腹を使用して2列同時に施文するという施文具に関しては、阿玉台Ⅱ式土器に見られる押引文（有節線文・角押文）と共通する。しかし、阿玉台Ⅱ式土器までに認められる押引文と、この土器の連続刺突文を比べると、差異が認められる。それは、施文具の土器面に対する角度と動きの違いから生じるものである。押引文が節と節がつながっているのに対し、この土器の文様は節と節が離れている。これは、施文具を土器面に対し連続的に押圧・刺突する手法で施文した際に出来る特徴である。こうした特徴は勝坂式土器に認められるキャタピラー文に見られる手法にちかい(1)。施文具の形状と手法から考えると、この土器の連続刺突文は勝坂式土器と阿玉台式土器の両方の特徴が組み合わさっていると言える。

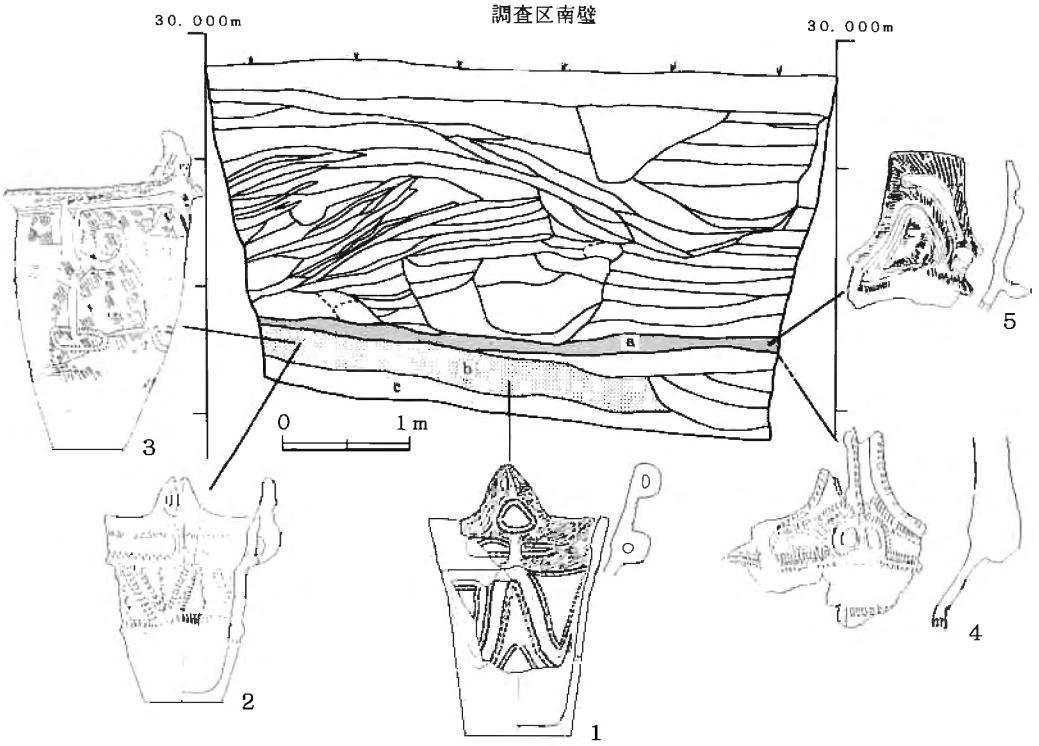
最後にここまで検討してきたことをまとめ、時期的な検討も加えてみよう。まず、器形に関することだが、大形の把手で正面観を強調していることから、勝坂式土器の特徴を強く残している。次に文様区画のうち口縁部文様帯だが、波頂部は勝坂式土器、その他の部分は阿玉台式土器の特徴を強く持っている。胴部区画に関しては勝坂式土器の影響が強い。文様要素の点では、連続刺突文の施文具の特徴は阿玉台式土器に、施文手法は勝坂式土器に影響を受けている。時期的な判断だが、阿玉台式土器の細分では、文様区画の変化と共に、区画文に沿って施文される文様要素も細分の指標の一つである。その区分に従うと、半截竹管の腹などを利用して複数列の文様を施文するという点では阿玉台Ⅱ式として捉えられる。ところが、隆帯の形状や全体的な特徴から考えると阿玉台Ⅲ式の特徴も持っている。この土器の時期的な判断に関しては、この土器と共伴した土器などとの層位的な点からも検討を加え、総合的に判断したい。

(4) 出土状況と層位的な位置づけ

1980年の調査は、前述のようにまだ整理・分析が終了していない。このため、第3図の土器の層位的な位置づけを考える上では、この土器に関連する層を示すにとどめ、層名も仮に記号で説明を進める。また、整理・分析中であるため、今後各層の帰属時期等の変更もあり得る。

個体1の土器は、平面的には第2図に示したグリットから破片の状態で出土した。層位的には仮にb層とした層から出土したが、いくつかの破片は、b層を彫り込んで形成されている遺構の覆土からも出土している。

b層の帰属時期であるが、各層から出土した土器のうち、纏まっている資料を判断基準として考えると、b層からは、勝坂2式土器・3式土器や阿玉台Ⅱ式土器・Ⅳ式土器も若干出土し



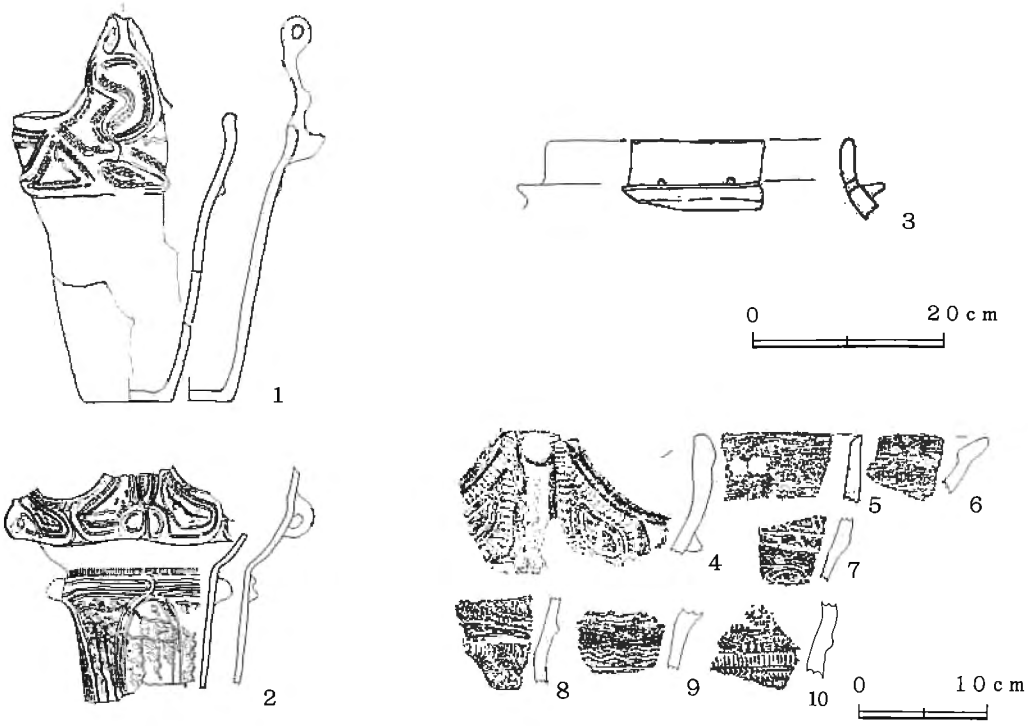
第5図　層位的な出土状況

ているものの、阿玉台Ⅲ式土器を主体としていることから、阿玉台Ⅲ式期の貝層であると判断できる。

上下の層との関係であるが、下層のｃ層からは纏まった資料はないが阿玉台Ⅱ式土器を主体として出土し、上層のａ層からは阿玉台Ⅳ式土器と中峠式土器が主体として出土している。

個体１の土器と同様な出土状況を示す事例としては、茨城県大谷津Ａ遺跡第42号住居跡があげられる。この住居跡からは、勝坂式土器の重三角区画文と阿玉台式土器の枠状文が融合した文様区画をもち、区画を構成する隆帯に沿って２列一組の連続刺突文が施文される折衷土器が出土している。そして、この土器の住居内一括土器は阿玉台Ⅲ式土器を主体としている。

このように、今回検討している折衷土器は、型式学的な検討と層位的な検討を総合すると、胴部の文様要素に阿玉台Ⅱ式の要素が残存しているものの、口縁部の区画を構成する隆帯の特徴と層位的な検討から、阿玉台Ⅲ式段階の土器であると判断できる。個体１の土器は型式学的には二つの型式の特徴を合わせ持つが、時期的にも二つの時期の特徴を合わせ持つ過渡的な様相を示し、阿玉台式土器の変遷を考える上でも興味深い資料と言える。



第6図　大谷津遺跡第42号住居跡出土土器

3．荒屋敷貝塚出土土器に見る土器の折衷化

荒屋敷貝塚出土の折衷土器を、勝坂式土器と阿玉台式土器との折衷土器と考え、各々の要素の系譜について考えてきた。それをふまえて、この土器が成立する状況を考えてみたい。

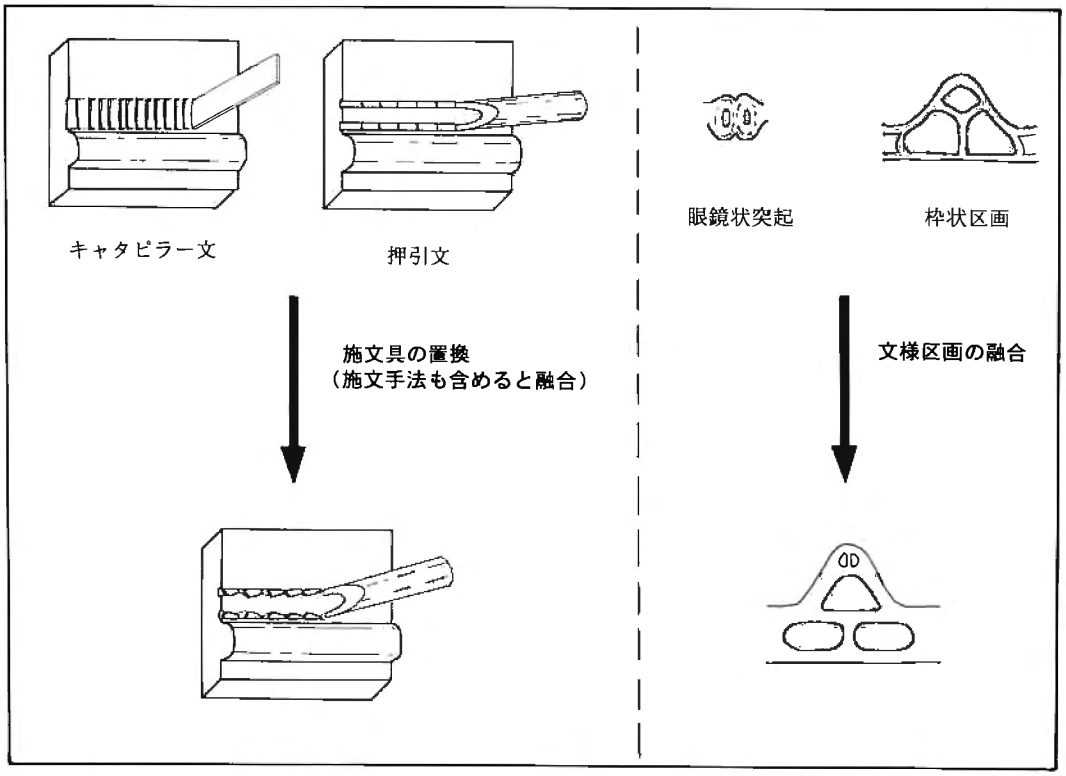
折衷土器として我々が捉えることの出来る土器は、同時期における複数の異系統土器の要素が混在し、一部は変形しているような状況（融合）を示しているものと、ある要素だけが他の要素に置き換わっている状況（置換）を示すものとに大きく分けることが出来よう。

実際の土器では、融合が認められる土器は製作された地域の型式の範疇からは大きく逸脱する土器、置換が認められる土器は土器全体としては在地の範疇で捉えられるが、文様の一部に他地域の影響を受けている土器として捉えられるだろう。だが、例えば置換という現象も、その土器型式を強く規定する部分に行われた場合は、その土器型式の範疇から大きく逸脱することとなる。このように融合・置換という現象が土器の様々な部分に様々な組合せで行われる結果として、折衷土器は複雑化していくことが考えられる。荒屋敷貝塚の土器の場合も、融合・置換のどちらか一方の原理のみで構成されているのではなく、その見方によっても異なる状況が読みとれる。例えば、文様要素の一つである連続刺突文は、施文具という点から見た場合は

交換と捉えられ、融合と捉えられる文様区画とは異なった原理で構成されている。ところが、施文手法を含めて見た場合は、変形を受けていることから融合とも考えられ、文様区画と同じ原理で構成されているとも捉えられる。

融合や置換が行われ、折衷土器が製作される状況を想定すると様々な状況が想定されよう。たとえば、ある土器型式の伝統をもつ製作者が移動し、自分の伝統に基づいて土器を製作しながらも、他型式の工具・素材を取り入れたり、土器の文様を取り入れたりする場合。あるいは製作者の移動を考えず、製作者は持ち込まれた他型式の土器を自分の所属する型式の伝統をもちいて模倣したり、土器は搬入されずに不完全な情報に基づいて土器を模倣したりする状況などが想定できる。

荒屋敷貝塚の例を阿玉台式土器と勝坂式土器の二つの枠の中で考え、融合・置換の状況を考えてみると、同一層位から出土した勝坂式土器が注目される。この勝坂式土器が搬入されたものとは現状では断言できないが、胎土の点から見た限りは、荒屋敷貝塚から出土した阿玉台式土器とも、個体1の土器とも異なっている。土器の検討のなかで、勝坂式土器の三角区画文が折衷土器の中に取り入れられている可能性を指摘した。第5図2の勝坂式土器の器形と文様帯、胴部の文様区画はそのままで、隆帯脇の文様要素を置き換え、口縁部の文様区画を阿玉台式土



第7図　荒屋敷貝塚出土土器にみる置換と融合

器のものを基本として融合したら、検討している折衷土器が成立するのではないか。この勝坂式土器の存在を積極的に評価すると、情報だけでなくモデルとなる土器が持ち込まれ、それに阿玉台式土器の要素がアレンジされた結果、折衷土器が成立したと考えることが出来る。この場合、個体1の製作者は、勝坂式土器を持ち込んだ人物、阿玉台式土器製作の技術をもつ人物の両方の可能性が想定できる。折衷土器成立の背景を考える場合、様々な状況を想定し、それを検証することが必要なのは言うまでもない。だが、なかなか検証に耐える事例や、検証方法が存在しないことも事実である。今回は将来的な検討にそなえ、基礎的な分類と検討にとどまったが、今後、荒屋敷貝塚のような事例をさらに体系的に検討することによって、折衷土器成立の背景を考えることが出来ると思う。

4．東京湾東岸地域における阿玉台Ⅲ式期の折衷化の様相

これまで、荒屋敷貝塚出土の折衷土器に対して、阿玉台式土器と勝坂式土器の2つの型式の交流という観点から、型式学的な検討と層位的な検討を加え、その位置づけを明らかにしてきた。そのなかで、器形と文様帯の構成・文様要素の点で阿玉台式土器の要素と勝坂式土器の要素が組み合わさっていることを指摘してきた。最後に、この土器が阿玉台Ⅲ式期の東京湾東岸地域のなかでどのように位置づけられるかを考えてみたい。

東京湾東岸地域で、阿玉台式土器と勝坂式土器の折衷土器が出土する遺跡の例として子和清水遺跡がある。子和清水遺跡からは、勝坂式土器、阿玉台式土器と共に、阿玉台Ⅱ式からⅢ式にかけての段階の土器で、本稿で折衷土器として捉えたような勝坂式土器と阿玉台式土器の特徴が置換、融合した土器も多く出土している。

ある型式内において、折衷土器は通常はほとんど認められないのであるが、東京湾東岸地域の阿玉台Ⅲ式土器の場合、子和清水遺跡の例に代表されるように、折衷土器がかなりの数を占める。この現象は阿玉台Ⅱ式の後半からみられるようだが、それが顕著になる阿玉台Ⅲ式期のこうした現象を土器型式の折衷化が進んだ状況として捉えたい。

阿玉台式土器のなかで、折衷化が進む状況の要因として何が存在するかは明かではない。そして、土器の折衷化が、勝坂式土器と阿玉台式土器の間のみで進んでいたのか、他の土器型式との間ではどうなのかも今後の検討を待ちたい。だが、折衷化が進んだ状況を、次の段階である阿玉台Ⅳ式期の土器様相との関連で考えた場合、阿玉台Ⅳ式期に下総台地を中心に認められる中峠式土器の成立に密接に関わっていると考える。

中峠式土器が当初、勝坂式土器と阿玉台式土器、大木式土器、加曽利E式土器との関係の中で捉えられていたように、中峠式土器は異系統土器の影響をうけている土器である。阿玉台Ⅳ式期に、中峠式土器のような異系統土器の影響を受けた新たな土器型式の成立をもたらした素地は、折衷化が進んでいた阿玉台Ⅲ式期に萌芽が認められるのではないか。荒屋敷貝塚の折衷

土器は、阿玉台Ⅲ式期の折衷土器が多くつくられるという土器様相の一面、特に東京湾東岸地域では勝坂式土器との関連が強かった状況を端的に示しているものではないだろうか。この地域を勝坂式土器と阿玉台式土器との関係から見た場合、一つの小地域性として捉えることも出来よう。

ここまで、荒屋敷貝塚から出土した折衷土器を、阿玉台式土器・勝坂式土器という二つの土器型式の観点からみた検討から始まり、東京湾東岸地域の阿玉台Ⅲ式期以降の土器様相についても考えてみた。実際の折衷土器が成立する状況としては、二型式間の交渉の結果によるものだけではなく、さらに複数の型式間の交渉の結果として生じているものも多いだろう。その意味では、荒屋敷貝塚出土の折衷土器も、二型式間の検討で用いた方法を応用してさらに視野を広げれば、また違った結果が見えてくるかもしれない。

複雑だとされる縄文時代中期の土器様相を解きほぐそうと試みてきたが、筆者の力不足から十分に目的を達成することが出来なかった。今後の課題としたい。

本稿の執筆にあたり、千葉市教育委員会文化課の庄司　克氏に格段の御配慮をいただくと共に、加曽利貝塚博物館の村田六郎太、湖口淳一、小澤清男の各氏には収蔵資料を身近に観察する機会をいただき、その発表の場を与えていただきました。また、明治大学助教授阿部芳郎、東京芸術大学大学院助手建石　徹の両氏には、日頃より暖かいご指導を受け、本稿の作成に際して貴重なご助言をいただきました。このほかにも様々な方にご助力・ご助言をいただきました。末筆ながら、改めてお礼を申し上げます。

（明治大学大学院博士前期課程）

（1）　キャタピラー文と押引文（角押文）の違いについては、大村氏による区分（大村1984）を参考とした。また、連続刺突文はここでは勝坂式土器に見られる連続刺突手法によって施文された文様の名称として用いている。

【引用・参考文献】

伊藤由美子　1997　「勝坂式土器に見る連続刺突文の消長」『六仙遺跡Ⅱ』
東久留米市埋蔵文化財調査報告第22集　東久留米市教育委員会

大村　裕　1984　「所謂「角押文」と「キャタピラー文」の違いについて」『下総考古学』7
下総考古学研究会

小林謙一　1984　「中部・関東地方における勝坂・阿玉台式土器成立期の様相」
『神奈川考古』17　神奈川考古同人会

小林謙一　1993　「多摩における勝坂式成立期の様相」『東京考古』11　東京考古談話会

小林謙一　1994a　「甲府盆地周辺における勝坂式成立期の様相」『山梨考古学論集』Ⅲ

山梨県考古学協会
小林謙一　1994b 「縄文時代中期前葉の南多摩中部域」『東京考古』12　東京考古談話会
子和清水貝塚発掘調査団　1978 『子和清水貝塚　遺物図版編１』
松戸市文化財調査報告　第８集　松戸市教育委員会
佐藤達夫　1974 「土器型式の実態－五領ヶ台式と勝坂式土器の間－」
『日本考古学の現状と課題』　吉川弘文館
佐藤正芳・鈴木美治・高村勇　1985 『大谷津Ａ遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第28集
茨城県教育財団
鈴木保彦　1981 「勝坂式土器」『縄文土器大成』２　講談社
谷井　彪　1979a 「縄文土器の単位とその意味（上）」『古代文化』31－２　古代学協会
谷井　彪　1979b 「縄文土器の単位とその意味（下）」『古代文化』31－３　古代学協会
谷井　彪　1977c 「勝坂式土器の文様構造について」『埼玉考古』16　埼玉考古学会
谷井　彪　1982 「勝坂式土器」『縄文文化の研究』４　雄山閣
種田斉呉・斎木勝　1978 『千葉県荒屋敷貝塚－貝塚中央部発掘調査報告書－』
千葉県文化財センター
千葉市史編纂委員会　1974 『千葉市史』第１巻　千葉市
寺内隆夫　1989 「長野県塩尻市北原遺跡第１号住居址出土土器から派生する問題」
『信濃』41－４　信濃史学会
中村恵次・中山吉秀・森尚登　1976 『千葉市荒屋敷貝塚－貝塚外縁部遺構確認調査』
千葉県文化財センター
西村正衛　1972 「阿玉台式土器編年的研究の概要－利根川下流域を中心として－」
『早稲田大学大学院文学研究科紀要』18　早稲田大学大学院文学研究科
西山太郎　1974 『千葉県荒屋敷貝塚－遺構確認調査報告書－』　千葉県都市公社
馬橋利行・工藤泰子・坂口隆　1994 『南養寺遺跡－Ⅷ・Ⅸ－』国立市文化財調査報告第35集
国立市教育委員会
山口逸弘　1990 「群馬県における阿玉台式の諸様相」『研究紀要』７
群馬県埋蔵文化財センター
山口逸弘　1991 「「新巻類型」と「焼町類型」の文様構成－群馬県の縄文時代中期中葉の二者－」
『土曜考古』16　土曜考古学研究会
山口逸弘　1992 「新道系土器群の変容過程－利根川上流域を中心として」『研究紀要』７
群馬県埋蔵文化財センター